
machine head

伊勢 周

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

m a c h i n e h e a d

【Nコード】

N 0 6 8 3 N

【作者名】

伊勢 周

【あらすじ】

春。

晴れて大学生となった青年・生方宗助は3人家族。

少しおちゃめな彼の父・克典と、入院する病弱妹・あおいと、幼馴染の木原亮太らと楽しく穏やかな日々を過ごしてきた。

しかしある日、テレビの向こう側の存在だった、世界中で発生する行方不明事件が身近に発生する。

不安な気持ちが大きくなった宗助は、妹の見舞いに彼女の病室へや
ってきたのだったがそこには、想像にもしない出来事が待ち受けて
いた！

生方宗助

1 生方宗助

隠し事は、どこにだって存在する。

どれだけ仲の良い友人や、恋人や、家族でさえも、必ず。自分を
守るために隠し事をしたり、相手を守るために隠し事をしたり。そ
れはもう、多種多様に渡って隠し事は存在するのだ。

さまざまな秘密を知っている側でいることと、何も知らないでい
ることと、どちらが幸せだろうか。どちらが不幸だろうか。なんに
しろ、秘密を知ってしまったその時から、何かと戦わなければなら
ないようになっていく。

生方宗助^{うぶかた そうすけ}がここ、城東大学に入学して10日が経った。入学式が4
月の2日だったため、今日は4月12日。天候は晴れ。桜が咲き誇
り、あたたかでゆるやかな風が吹いている。

どの大学でもそうなのだが、この時期は漏れなく激しい部活・サー
クル勧誘が行われており、学校中のスペースに所狭しと勧誘用のブ
ースや机が軒を並べている。

これまた漏れなく宗助も、うんざりした顔で先輩達の手厚い歓迎を
受けまくっているところだった。

「君、君。」

恐らく彼に向けて発せられているだろうその声は、しかし返事など
待ってはいない。

「いい身体してるね。アメフトとかどう？楽しいよ！？え？興味ない？いやいや、みんな最初はそう言って、徐々に嵌っていくんだって！じゃあさ、携帯の番号教えて、ね？番号くらいいいでしょ？だめ？ええ、いいじゃんいいじゃん！いや、悪いようにはしないからさ！」

矢継ぎ早に浴びせられる声。迫る巨体。それも、ひとつではなく3以上の複数。

この、今まさに体格の良いアメフト部数人に絡まれている宗助という青年は、今回たまたま目を付けられたという訳ではなく、入学して以来この方、体育会の方々にモテモテなのである。

なぜそんなにモテているのか、というと。

彼は幼馴染の家が開いている剣道道場に「門下生がいないから」という簡単な理由で叩き込まれてしまい、訳もわからない内に竹刀で叩き回され転げまわされて、それでも持ち前の負けん気を武器に剣道を（あまり強い方ではなかったが）10年以上続けてきた。

そのおかげで、身長はスラリと伸びて体力もつき、体格もがっちりして人並み以上の根性を持ち合わせた青年に育ったのだ。

そして、その恵まれた体格とスポーツを長年続けてきた人間だけが持つあの独特の雰囲気惚れ込んだ先輩達が、なりふり構わずアタックしてくるのであった……。

命からがらアメフト部の囲い込みから逃げ出した宗助は、先ほどに少し話題に出た幼馴染・木原亮太きはら りょうたと待ち合わせをした場所に向かう。そう、大学までその幼馴染と被ってしまったのだ。

小学校・中学校・高校・大学と同じ、所謂腐れ縁。

示し合わせた事は一度も無い。

なんとなく興味の方向性や、好みの対象等が被ってしまうのだ。不

思議なことに。

待ち合わせ場所に到着すると、すでに亮太が姿を見せていた。

「おう、宗助！」

「おう、待たせたな。ほんじゃ食堂いくか。」

「腹減った、あぁ、腹減ったわ、腹減ったな」

「あぁ、腹減ったよ。」

「腹減った！」

「うるさい！」

とにかく、腹が空いたということを互いに主張しながら、昼食を共にするという約束を果たすために、学生専用の食堂に向かう二人であった。

「そーいやさ、宗助。」

「んん？」

呼ばれた彼は、かきあげうどん（320円）をすすりながらとりあえず返事だけする。

「あおいちゃん、元気にしてる？」

「あぁ、あおいか。・・・まぁ、元気なのはそこそ元気なんだけど、やっぱ精神面の問題なのかな、なんか、体調も治りきらないみたいでさ。」

「そうか。ま、行方不明だとかなんだとか、近頃はずっと物騒だからな。危ないのは病気だけじゃないぜー。」

そう言って、亮太はラーメン（350円）の底を掬っている。早くも食べ終わってしまったらしい。

「まあ、また今度見舞いにいってやってくれよ。」

「まあ、そのつもりだ。あおいちゃんかわいいいなあ。」

「動機が不純なんだよおまえは。」

「すまじやがって、男なんてみんなそんなもんだろうが。」

「あーあーわかったわかった！」

『あおい』というのは、この春で高校2年生になった宗助の妹の事だ。

元から身体が弱く体調を崩しがちだった彼女だが、1年前の母の病死を機にますますって身体が病気がちになってしまい今も病院に入院している。そのため朝はいつも父親の克典と二人で過ごすという、なんとも重たい日々を過ごしている。その為宗助は『一刻も早く妹に退院してほしい』といつもこぼしているのである。

「ま、近いうちに様子見に行くって言うといてくれよ。」

「気が向いたらな。ああ、そろそろ出よう。」

続いて宗助も食べ終わる。

食堂は席を求める学生達で溢れかえってきたので、ここは空気を読んで席を立つ。食堂では、混雑時には食べ終われば席を立つのは当然のマナーであると考えている。話をする場所なんて、広い構内だ、探せばどこにでもあるのだから。空の容器を前にしても、席をあけずに話に華を咲かせている女学生連中を渋い顔で一瞥して、お盆を回収棚に置き、食堂の出口へ向かう二人だった。

食堂を出た二人は、できるだけ勧誘が少ないところを狙って歩いていた。

学校のそういった勧誘には元締めの委員会があって、勧誘できるエ

リアを定めており、そのエリアを超えて勧誘すると罰則が下るのである。

よってその禁止区域を掴んでさえいれば、勧誘の波は最小限にすることができるのである。

「ああ、うちの大学の食堂はなんだか、まずいのかうまいのか。多いのか少ないのか。全ての面で微妙だよな。まだうどんしか頼んだことないけど。」

と、突然宗助が漏らす。

「宗助もそう思うか。まあ世の中完璧すぎる商品より、ちょっと物足りないなっつくくらいのが売れるのよ、きつと。昔から、俺よりお前のが女子に人気だったりするのはそのせいなわけだな。まったく。」

「

宗助に、幼馴染という視点からこの木原亮太という男を語らせると、一言で言うなら完璧な男というのが当てはまる。

容姿端麗・成績優秀・おまけに運動神経は抜群。

友人関係は広く、性格もきさくで付き合いやすい良い奴だ。

そしてそれと比べてしまうと宗助は、「どれも悪くはない」に甘んじてしまう。

宗助自身、小・中・高と付き合ってきて、勝っているところは身長くらいじゃないのかと思ったことさえある。

「なんだそれ。嫌味か。モテた覚えなんてないぞ。勝手な事実を作ってからかおうとするなよ、人を。」

「いやあ、もういいって、そういうとぼけたのは。」

眉をしかめて反論する宗助とは反対に亮太は、くっくくくつと笑う。

彼は、何かいじれそうなネタがあればいつもこうして宗助をからかおうとするのだ。

しかし、宗助は本気でとぼけている訳ではなく実際にあまりそういった話に縁がなかった。

からきしなかった、というわけではなく、高校の時に恋人ができた事はあった。同じ学校で、一つ年が上の陽気な女性だった。気付けば彼女は、自分の名前を楽しそうに呼び、自分の手をこれまた楽しそうに引っ張っていた。

でも、「付き合う」というのがいまいわからず、宗助が気付いた時にはその彼女は宗助の元を離れていってしまった。苦い苦い経験だけが残っているのだ。彼女は元気にしているだろうかと未だに時々思い出しては、少し切なくなる宗助であった。彼女は、自分の事など忘れ、また陽気に誰かの手を引っ張っているのだろうか。

「…そうだ、宗助は、なにか部活とかサークルとか入るのか？」

遠い所を見つめたした宗助を見かねたのか、亮太はえらく唐突に話題を切り替えた。

「えらく突然だな。まあ、そうだな。なんにもなしでバイトと授業だけってのも味気ないだろうし。剣道はやるつもりはないけど。」

「そうか。親父が『ぜひ宗助君も引き連れて剣道部に入りなさい』って言ってたんだけどな。ま、どっかいところがあれば教えてくれよ。」

「ああ、わかった。…っと、そろそろ授業が始まるな。」

宗助が腕時計を確認すると、もう昼休み終了10分前だった。

「本当だ。そんじゃあ、また今度だな。あおいちゃんによろしく。」

「おお。」

そういつて二人は別れていった。

machine head 1-2 おかしな能力

時刻は16:00。

宗助の今日の授業は終了し、妹・あおいの見舞いに行こうと、まだ盛んに行われている勧誘の波を潜り抜け病院に急ぐ。宗助には、今から会いに行く妹にも、幼馴染にも、父親にも、誰にも言っていない隠し事がある。

『なにかおかしな能力が身についている。』

それに気がついたのは、高校生になった頃だった。気がついた、というより、それが芽生えたと言った方が正しいだろうか。

風呂の湯船にもぐる自分の手のひらや身体から、普通では考えられない量の気泡がポコポコと発生していた。

まるでなにか発泡性の入浴剤を湯船に入れたかのように。なんだか気味が悪くて、誰にも言えなかった。それによって体調が悪くなるだという事もなかったし、だいたい医者や家族にどう説明しろというのだと、一人で抱え込んだ。

意識を集中させる事によって、気泡の発生を止めることができたり、一気に大きな気泡を生み出せたり、ある程度自分の思うままに操れる事がわかった。宗助は、『これは、自分にだけ与えられた特別な力に違いない』と、誰もが一度は抱くような非日常への憧れがたつた今自分に訪れている事にドキドキと胸を膨らましていたのだった。しかしそれと同時に、『せっかく与えられた超能力が、気泡って…どうなんだ?』と落胆を感じてもいたのだが。

そう、空気が出せるからなんだと言うのだ。これじゃあ植物が光合成してるのと大して変わらない。

そんな自虐の心に塗れながらそれでも、宗助は紛れもなく宗助だけの超能力を持っている。ただ、使い道が思いつかないだけで。

城東大学最寄りの駅から電車で10分。

そこからさらに、わき道にあじさいが敷き詰められた道を10分ほどまっすぐ北に歩くと、仙谷総合病院に辿り着く。

『仙谷という人物が経営している病院』という訳ではなく、宗助達が住む町の名前が『仙谷』だからである。読み方は『せんごく』。

仙谷総合病院は、この町で一番施設が整った病院である。「303号室」　そう書かれた扉の前で立ち止まる。　コンコンコン、とノックの音が、病室に響いた。

2回だけのノックは【トイレノック】といって、あまり行儀のよいものではないらしいという話を聞いて以来、彼は律儀に3回ノックするようにしているのだ。

「はい。」

返事を確認して、病室に入る。

「あおい、身体は平気だったか？」

「お兄ちゃん、今日も来てくれたんだ。うん、大丈夫だったよ。」

ここは、生方あおいの病室。

贅沢にも個室の病室で、中にいるのはあおいだけ。

変なところで臆病で、娘に会いに行くのも『行き過ぎると嫌がられ

ないだろうか』、と怯えて躊躇っている父親が、せめてと氣を利かせた結果が彼女の個室病室での入院生活を実現しているのだ。

「そりゃよかった。亮太も、早く元氣になれよーって言ってたぞ。」

あおいが寝ているベッドに近寄り、置いてあった椅子に腰掛ける。

ベッドの脇には、クラスメイトから少し前に贈られた、千羽鶴と、生花が花瓶に飾ってあり、開け放たれた窓から入ってきた風にその頭を揺らしている。

暖かくなってからというものの、妹は寝るとき以外のほとんどは窓を全開にしている。

春の空気とか風とかそういうのが、つまらない入院生活で乾きそうな心を癒してくれているらしい。今日も、黒くて長い髪をふわふわと気持ちよさそうに風に靡かせて。

この病室は3階だから、そこまで心配はないのだろうか、宗助は兄としては防犯の面で少し危なっかしさを感じているのだった。

こんなことを考える自分は心配性なのだろうか、シスコンなのだろうかと自分を疑う時もあるけれど、大事な家族を心配して何が悪いのか、と近頃は開き直っている。

「うん、できるだけがんばる。って言っというて。」

「自分で言えよ、俺はメッセンジャーじゃない。あいつなら近いうちにお見舞いに行くとも言っていたしな。」

「そっか。」

「そうさ。まあ、俺も早く直る事を願ってるよ。早く元氣になってくれないと、毎朝男だけで過ごすのは、たまらなくむさ苦しくてさ。」

「ふふふ、はいはい。わかりました。」

困ったように笑う妹を尻目に、宗助はごそごそと鞆を漁り高校生用の教科書を取り出した。

「ほんじゃあ今日も、勉強はじめるか。」

「あ、はい。」

結局その日も、いつも通り面会時間ギリギリまで入院している分の妹の勉強の手助けをしたりして。宗助は、妹想いのなかなか良い兄貴であった。

machine head 1-3 妙な夢

よく似た子供が、仲良く2人で市街地を歩いている。2人とも女の子だ。双子だろうか。その両端には、大人の男の人と、女の人。おそらくその4人は家族だ。とても幸せそうなの。

【場面転換】

どこかの家の前だろうか。白衣を着た男の人が、双子のうちの片方と話している。車のような物に、白衣の男と一緒に乗り込んで、もう片方の女の子はそれを泣きながら見送っている。父親と母親は、その子をたしなむように頭をなでている。

【場面転換】

子供がたくさんいる。幼稚園かなにかなだろうか。先ほどとは違う白衣の年長いた男性が、ガタイの良い人間を引き連れて歩いている。そして先ほどの少女に話しかける。

【場面転換】

研究所のような場所。必死に何かを叫んでいる夫婦。年長いた男性と何かを話している。女の人が、ガタイの良い人間に首をつかまれ、持ち上げられた。男性が必死に放させようとするが、ビクともしない。女の方は、しばらく足をばたつかせていたが……

【場面転換】

冷酷な目。うめき声。

【場面転換】

滴る血。

【場面転換】

なにかの死骸の、山。　その中で、目を見開き咆哮する少女。

「…うわぁ！」

宗助は、自分の大きな寝言で目が覚めた。

シャツを搾れば、水溜りが作れるだろうと言うほど汗を掻いていた。

「…はぁ。」

うんざりしたようにため息を吐く。宗助はここ数日、妙な夢を見るようになっていた。内容は微妙に違うが、大筋は同じ。

（…またこの夢か……。）

上半身のみ起き上がらせて、頭をボリボリとかく。

（…空気の超能力の次は、神様のお告げか何かですかあ……？）

と寝起きでぼんやりする頭で自嘲気味な思考を巡らせ、次に時刻を確かめるために携帯電話を開いた。

「 a m 2 .. 4 6 」

「…寝よう。」

ポフツと音を立てて、頭を枕にダイブさせる。目を閉じて、眠ることに集中する。さすがに、一夜に同じ夢を二度見る、という事はなかった。

翌朝。宗助は朝食を摂りながら、朝のテレビニュースを父親と二人で眺めていた。またしても行方不明の人が出た、と小太りのニュースキャスターの人がテレビの画面で伝えている。

犯罪心理に詳しいとかいうコメンテーターが独自の見解を述べている。

ここ数年、謎の失踪事件が毎週のように、世界中で発生している。それは音もなく、前触れもなく、法則性もなく起きていく。カナダで発生した翌日、シンガポールで発生する事さえある。

もちろん日本でも既に何十件も発生しており、その正体不明の失踪事件を恐れ、「神隠しだ」と騒ぎ立てる人々が現れる始末なのだ。

「まったく、なんなんだろうな、この行方不明の事件。今月でもう10件って、昔よりひどくなってるじゃないか。どうなってるんだ。」

宗助の父・克典^{かつのり}が、険しい顔つきで、ネクタイを結びながらテレビを睨んでいる。たまにこんな父親の顔が見えるたびに、娘に関してもそのくらいの雰囲気を出せないものか・・・と宗助は思っている。口にはださない。

「そうだ宗助、今日もおおい、見舞いに行ってくれるんだよな。」

突然出てきた妹の話題に、心を読まれてもしたのだろうかと思いきりする宗助。顔には出さず、至って普通に受け答える。

「ああ、そのつもりだけど。今日も父さんはいかないのか？」

「いやあ……、行きたいのはやまやまなんだが、父さんがいると、あおいもなんだか居心地が悪そうにアレするもんだから……。」

と、先ほどの険しい顔もナリを潜め、いかにも周りに遠慮しています、胃腸弱いです、という顔に早変わりしてしまった。

宗助は、ほうら、また出たよ。と、内心うんざりしながらも「別に、そんなことないと思うけど。」と、とりあえず否定はしておく。だがしかし、

「いいや、ある、あるな。宗助にはそのへんのそういうあれがわからんのだな。」

妙なところで自信満々に語る父。

「そういうあれってなんだよ……。」

そして宗助は、心底呆れた口調で呟くのであった。

「そんなことより、もう会社行く時間だろ、頑張っていてらっしゃい。」

克典はそう言われて時計を見ると、「しまったぁーッ！今日は朝一のアレがアレなのにー！！」と、大慌てで家を出て行った。

「事故るなよー、たく……。」 宗助は、皿に乗っていたトーストの最後のかけらを口に放り込むと立ち上がり、続いて出かける準備に取り掛かるのだった。

日常的に起こる行方不明のニュースに感覚が麻痺していて、今朝の

ニュースも特に驚きはしなかったのだが、今回の行方不明者はうちの大学の生徒だったらしく、大学の連絡掲示板には警戒を呼びかける掲示物が早速貼り出されていた。

掲示物を一瞥して、今日も食堂にやってきた亮太と宗助の二人。未だに犯行の手口も狙いも、影すら見せないその何かに、どう警戒しろと言うのか教えて頂きたいもんだぜ、と木原亮太はぼやいていた。

「そういえばよ、宗助。人型のロボットが出現して人間を襲っている、って噂、中学生のときに話題にならなかったか？テレビとかでもやってたろ。なんか『画面の端を、よくご覧頂こう…』とか言ってるさ。俺、思うんだけどさ、もしかして、それは現実のものでさ、犯人はロボット！だったりしてな！」

「……、あのなあ、そんなもん、映画じゃないんだから。だいたい、だれがどこで何のためにそんな機械作ってるんだよ？」

「そりゃあ、なんかこう……悪の秘密組織とかがさ。」

「……………」

二人に沈黙が訪れる。

「あのさ、それ、本気で言ってる？」

「……さあ……。」

再び二人に沈黙が訪れる。

「…冗談なら、今度、あおいに聞かせてやれ。10秒くらいは暇つぶしになるだろうよ。ほんとに10秒くらいなら。」

「いやいや、でも、宇宙人や超能力の存在よりは、現実的だと思うけどな。俺は。」

亮太の言葉に、狐につままれたような顔をする宗助。

「超能力…か…。」

「…？　なんだよ。」

「…いや、なんでもない。」

超能力。実際に使えるんだぜ俺。身体から、気泡出せるんだぜ、気泡。

なんて、恥ずかしくて言えなかった。

その日の講義終了後、父との約束通りにそのままあおいの入院する病院へ向かう。

途中で妹の好きなお茶菓子を買っていくのも忘れない。

いつも仲良くしている看護婦さんと挨拶を交わして、いつもの303号室に足を踏み入れる。すると、そこにはベッドですやすやと寝息をたてる妹の姿があった。

宗助は特に気にすることもなく、静かにゆっくりとベッドに近づくと、脇にある椅子に腰掛け、妹の姿をぼおつと見ていた。

（行方不明…か…。）

今日の話題に出た行方不明の事件について、宗助は漠然とした不安を感じていた。

日本の警察は世界でも屈指の捜査力を誇ると聞いているが、それでも未だに犯人の手がかりさえみつからない。それどころか今朝はあまり気になけなかったが、ついに自分達に手が届いてもおかしくはない範囲にまで事が及んだのだ。自衛の手段として木刀でも持って歩こうか、とか、父やこの目の前の妹がその魔の手にかかってしまったらと思うと、彼の不安は尽きない。

そうして、しばらくベッドに眠る妹を見ていたのだが、あまりに気持ちよさそうに寝ているものだから、見ている宗助自身にも急激な眠気が襲ってきた。

（そういえば今日はあの夢のせいで、少し寝不足気味だったし、少

し眠ることにしよう。妹が起きれば、その時起こしてくれるだろう。
)

そう考えて、椅子に座ったままベッドの淵に顔を埋めると、思った以上に柔らかく、適度にひんやりとした感覚が心地よくて、すぐに意識を手放した。

「んん……」

しばらくして眠りから覚めた宗助は、両手を真上に上げてぐっと上半身を伸ばした。

開けっ放しの窓から吹き込んだ春風が、あおいと自分の髪をなでる。寝起きの眼には西日が眩しく、この部屋の主人の方に目をやったが、未だに眠りから覚めていないようだ。

窓の外に目を移すと、陽は暮れかけていて、赤い空とオレンジの雲が空を彩っていた。

「もう夕暮れかあ……。」

1時間は眠っていただろうか。時計に目をやると、ちょうど5時半を指していた。このまま帰ったのでは一体何をしにきたのかもわからないので、行きしなに買ってきた妹の好物である『つるや』のまんじゅうを渡すため、悪いが起きてもらうことにする。

「おい、起きろ、昼間から寝てばかりいたら、夜眠れなくなるぞ。」

そう言って妹の肩に手をかけたその時だった。

ふ、と、宗助たちの顔に差していたはずの西陽は遮断され、病室に、夕暮れ時特有の長い影が落ちる。

おかしい、なにか遮蔽物があったのだろうか。

と、宗助は不思議に思い、顔を影の先に向ける。

窓際に、ひとつの影の主が立佇んでいた。

人……？

いいや、そんなわけがない、ここは3階だ。しかしどう見たって、羽を休めに来た鳥って形や大きさじゃあない。

逆光でシルエットしか見えないが、そいつはあきらかに人の形をしている。

子供だろうか。少しサイズが小さい気はするが、確かに手足と頭がある。

そして顔の部分は、しっかりとこちらを見ている。

まるで、今までずっとそこにいたかのように生気が感じられず、静かにこちらを見据えている。

恐怖と不気味さを感じるには、十分だった。

本能が逃げると、全身に伝えている。

手のひらに、いやな汗がじんわりと広がっていく。

逃げろ、逃げろ、逃げろ！

なにか、やばい――！

宗助は慌てて妹を抱きかかえ、一目散にソイツがいる窓とは反対側の、部屋の出入り口に向かって駆け出した。

急に抱きかかえられた妹も当然目を覚まし、自分を抱きかかえる兄に困惑の声を上げる。見上げた宗助の顔の色は、焦燥。

「お、お兄ちゃん！？なに、なに！？どうしたの！？」

「じっとしてろ！」

両手はあおいで塞がっているため、引き戸である扉の取っ手に右足をかけ、蹴り開けようとした、その時。

宗助は、着ていたジャケットの襟を背後から掴まれ、グンツと凄まじい力で引っ張られ、投げ飛ばされた。

「うぐっ！」

「きゃあ！」

ゴツ！と、壁と人間がぶつかった、痛々しい音が部屋に短く響く。

勢いそのままに壁に叩きつけられ、宗助は背中を強打し、そのまま尻餅をついた。肺の空気を一気に押し出されたように、うまく呼吸ができず声が出せない。

腕の中の妹も、腕は放さなかったものの、投げられたはずみでどこかに頭をぶつけてしまったのか、ぐったりして動かない。

「…あ、ぐ……。…」

懸命に呼吸を整えようとする宗助だったが、ひゅー、ひゅーと不自然な呼吸音だけが漏れ、上手く呼吸を整えることができない。

徐々に、背中から鈍い痛みが押し寄せる。

「…んだよ、…れは……。なにがどう…って……。…」

—いいや、なにがどうなんて、どうでもいい！なんとか体勢を整え、この部屋から、こいつから逃げ出さなければ—。

そう思い顔を上げ、敵の姿を確認したその時、宗助は啞然とした。

昼間に聴いたばかりの幼馴染の言葉が、頭にこだまする。

—そういえばよ、宗助。

人型のロボットが出現して人間を襲っている、って噂、中学生のときに話題にならなかったか？

テレビとかでもやってたろ。なんか『画面の端を、よくご覧頂こう…』とか言ってたさ。もしかして、それは現実のもので、犯人はそいつだったりしてな！—

（そんな・・・、そんな馬鹿な！！）

それは、黒く、禍々しく。人の形を模ってはいても、そこには一切の感情を感じ取れない。

宗助の視線の先には、スターウォーズのようなSF映画でしかありえないような、全身に鉄の装甲が施された、機械仕掛けのロボットが存在していたのだ……！

machine head 1-7 混乱の夕暮れ

ゆっくりと歩み寄ってくるソイツを見ながら、『ああ、こんな人間のよう滑らかな動きが、現在の地球の技術で実現できるものなのだろうか』なんて的外れな事を一瞬考えたが、すぐに思考を切り替える。

ようやくして、なんとか正常に呼吸ができるようになったが、投げ飛ばされてしまったせいで入り口が遠くなってしまった上に、部屋の隅に追い込まれてしまった形だ。

この突然喉元に剣先を突きつけられたような危機に対して、決断しなくてはならない。可及的速やかに。

気を失った状態の妹を抱えて、この謎のロボットをかわして、出口まで走り抜けるか。

妹が先ほどまで眠っていたベッドの脇にあるナースコールを押して助けを呼ぶか。

：一か八か、戦って勝利するか。

ガチャリ、とまたひとつ、こうしている間に地面と金属がぶつかる音が近づいてくる。ナースコールを押して看護師の人に来てもらっても、いくらか時間がかかるしどうにかなると思えない。あの鉄の装甲を、自分の力で破れるとも思えない…。

残った答えは……『かわして逃げる』だ。

宗助の目の前に立ちふさがるこの機械は、一見細身で自分よりも一回り小柄だが、先ほどは考えられないような力で体を引っ張られた。ただかわすだけじゃ成功する可能性は見えない。

（なにか、竹刀でもなんでもいい、得物で相手を攻撃して、その怯んだ所であおいを担いで、ここから脱出する！なにか、武器になるものは…。）

宗助の右手に冷たい感触が伝わってくる。視線だけ自分の右手の先にやるとそこには、来客用の自分が使っていた物とはまた別のパイプ椅子が床に転がっていた。宗助はあおいをそつと床に寝かせると、パイプ椅子の背もたれの部分をぐつと掴み、悲鳴をあげる背中にぐつと力をこめ痛みを押さえつけ、立ち上がった。

「この野郎、いったいなんの恨みがあるのかしらねえが……！」

ガチャリとまた、一步ロボットが近づいてくる。

「ここでさようならだ……！」

自分の呼吸の音が、えらく大きく聞こえる。

（重要なのは間合いだ…。自分の攻撃が必ず当たると確信できる、相手が攻撃を仕掛けてくる、その位置関係を見誤るな、生方宗助！）

ガチャリ。

（もう少し・・・。）

…ガチャリ。

（焦るな、焦るな。もう少しだ・・・相手をよく見ろ。）

…ガチャリ。

（あと一歩・・・）

ガチャ（今っ！）

「うおりゃあああああああああ！！」

宗助は、威勢の良い掛け声と共に両手で持ち上げたパイプ椅子を、頭の部分をめがけて、思いっきり右から左へ薙ぎ払う。

ガキン！！と、宗助の耳には、金属と金属がぶつかり合う音を、両手には、確かな鈍い痛みと手ごたえを伝えていた。

machine head 1-7 しょうたいふめい

ガキン！と、宗助の耳には、金属と金属がぶつかり合う音を、両手には、確かな鈍い痛みと手ごたえを伝えていた。

（どうだっ……！この機械野郎！）

少しでも隙が生じていれば、その瞬間を見逃すまい、と、攻撃した相手を確かめた。

しかし。

なんという事だろう。そいつは微動だにしていなかった。

なんて浅はかだったのだろう。と、宗助は心から悔いた。

正体もわからない敵の懷に飛び込んで。

強力な武器を有しているならまだしも、自分の手にはパイプ椅子。

「くっ――、」

その一瞬の後悔と絶望が隙を生み、次の動作を鈍らせてしまう。

宗助が、もう一度パイプ椅子で攻撃を加えてやろうと体を右に捻って振りかぶった瞬間……『機械野郎』の作った右の握りこぶしが、宗

助の腰にめり込んでいた。

「ぐっ・・・!!」

体が宙に舞い、視点がグルグルと回転する。

いったいどんなパワーで殴られればこんな事になるのだろうか。宗助は先ほどまで自分が座っていたパイプ椅子を巻き込んで、またしても吹っ飛ばされたのだった。

（くそ、いってえ……。）

それでもなお宗助は起き上がろうとする。足を挫いたのだろうか、激痛が走り、思うように立ち上がれない。

四つん這いの状態から視線を上げると、そこには奴が妹の元に近づこうとしている処だった。

「待てっ・・・よ・・・この・・・野郎っ・・・!」

もはや息も切れ切れといった様子で自分を殴り飛ばした『ソイツ』に声を上げる宗助だったが、聞こえているのか見向きもしない。なんとか止めようと、体を動かそうとするがうまく体が動いてくれない。声もでない。右手が虚しく空を切り、体はバランスを崩し地面に這い蹲った。

（寝てる場合かよ、ちくしょう! 動け、起きろ! 今起きなかったら! 今しかないのに!）

「一、きろっ・・・! おきてっ、に、げろっ・・・! あおい!」

喉の奥から懸命に搾り出したその声も、彼女に届くことは無かった。

とても、スローモーションで目の前の出来事が過ぎていく。

ロボットと、妹の、最後の距離が縮まって

ロボットの右手が振り上げられて、妹に向かって―。

やめろ…！

やめろおおおおおおお！！

その後響いたのは、

びゅん、と風を切る音と―。

machine head 1-9 わからないけど。

仙谷総合病院3階、303号室。

その中では、気を失い、地面に伏している少女と、体に無数の傷をつけた青年。

―それと、まるで研ぎたての包丁で真二つに切られた果物のように、綺麗な断面を見せながら、（人間と同じように定義するなら）腰を境に上半身と下半身で真二つになった、二人をこうにまでした原因そのものがあった。

宗助は、その場にいらながらも、その目の前に起こった光景がまったく理解できずにいた。先程まで自分たちに牙を向いていた、パイプ椅子で思い切りぶん殴る程度ではびくともしなかったロボットが、何の前触れも無く上下真二つになって崩れ落ちたのだから。

宗助は、痛む身体に鞭を打ち、立ち上がって妹の元に向かった。

どうやら彼女も命は無事のように、意識はないが呼吸はしっかりとしている。とりあえずこの場から離れなければと、寝ている妹を抱き上げて機械の横をおそろおそろ通り過ぎ、今度こそ出口に向かうとした、その時だった。

カタン。

と、またしても窓のほうから伝わってくる物音。

宗助が、思わず振り返った先には。
今度は間違いなく、生身の人間がいた。

軍服のようなカーキのジャケットと、下はジーンズを着た女が、スラリ伸びた足を窓枠にかけ。赤みがかかった髪を、頭の後ろで一つにまとめさらさらと夕方の風にその髪をなびかせて。

その手には、現代に似つかわしくない日本刀と思しき物を携えてこちらを見据えていた。

（女……？か、刀あ！？一体なんなんだ！こいつも襲ってこようってのか！？）

とっさに腕の中の妹を守るように抱え、身構える宗助。
しかし、身体が痛んでうまく体勢を整えることができない。宗助はそれでも考える。

今の奴を、もし自分がやったとしたなら、それで身は守れるかもしれない。しかし、どのように先ほどの技を繰り出したのか自分でもわからない。しかし、人間だとしたら、ある程度話は通じるかもしれない。しかし、三階の部屋に窓から侵入してくる人間に、まともな話が通じるとも思えない。

度重なり発生する不思議現象に、宗助の頭の中ではぐるぐると「○
○だ。しかし」という文章が駆け回り続けていた。

するとその女は、「ほっ」と言いながら窓から部屋に降り、真二つになったソレをマジマジと眺め始めた。ある程度眺めると、満足したのか今度は宗助の方に顔を向ける。

「ねえ、これ、誰がやったの。」

それが彼女の第一声。

「……だ、うえ？」

宗助には、妹の病室に不審な敵が現れたり、その後すぐに窓から日本刀を持った女が乱入して来た時の対処法なんて頭にあるはずがないので、その声に対する言葉がうまく出てこず、その上全く噛みようがない場面で思いつきり噛んでしまった。

「だからあ、そのの、真二つになって倒れているやつよ。あんたがやったの？」

彼女は、少し不機嫌そうに眉を顰めながら、再度問いかけてくる。

宗助はというと、次から次へと迫り来る現実離れした状況に、混乱しっぱなしでいた。

「こ、ここ3階だぞ……外には登るところなんてないし……どうやって……？」

彼としては、真っ当な質問をぶつけたつもりだったのだが、彼女は意にも介さない。

「先に私が質問したの。ね、こんな芸当、一般人には不可能だと思っただけ。」

そういつて、その女はその真二つになったソレを足蹴にする。ソレ
はガコンと音を鳴らして転がった。宗助はやはり大混乱中で、今
にもなにか叫びたい衝動に襲われ、どこかに走り去りたい気持ちで
溢れていた。

だがしかし張り詰めている警戒は解けないのか、一挙手一挙動見逃
さないように女から目を離そうとしない。

そんな様子を見かねたのか、彼女はやれやれ、と言わんばかりに両
手を上げてブラブラさせ、

「ああー、そんなに警戒しないでよ、とって食おうってワケじゃな
いから。むしろ助けに来たつもりだったんだけど・・・必要なかっ
たのかな。」

と言いながら近寄ってくる。

そんなことを言ったって、いきなり刀かついで3階の窓から飛び込
んでくるような奴に警戒するなど言うのも無理がある話だ。宗助は、
一定の距離を置こうと後ろに下がり、なんとかしてナースコールを
押そうと、チラリとボタンの方を見る。

彼女は、警戒を解いてくれない宗助に苦笑いを浮かべていたが、ま
あ、無理もないか、と呟いた。

「じゃあ、あなたの質問に先に答えてあげるわよ。」

そういうと、彼女は立ち止まり微笑んでみせた。

「どうやってここまで、っていうのはまあ・・・地面からジャンプ
してピョンピョン、とね。」

彼女は、人差し指で空中にアーチを2，3架ける動作をしてみせる。

「建物って、コツつかめばすぐ登れるもんよ。ほーら、質問に答えた！怪しくないでしょ？楽にして、ちこうよらんかー。」

彼女は、こっちにこいこい、とまるで犬を呼び寄せる時にやるような、手をぴよこぴよこさせる動作を向けた。

（と、飛んできただど！？怪しい。怪しすぎる！）

そんな彼女とは対照的に、脳内にある危険レーダーがビンビン稼働中な宗助。だが、宗助はこうしてその女と会話をしていて、なんとなく感じとった。

攻撃を仕掛けようだとか、何か裏をかいてやろうだとか、そういった類の気はない。この女には。

ようやく少し警戒を解く宗助。とりあえずこの日本刀女に敵意はない事は間違いなさそうだと感じたのだ。

「わかったよ。もうあんたを警戒しない。」

「お、話が早いね、助かるよ。ほんじゃー落ち着いてきた所で、もっかいこの質問するよ。いいね？……コレ、どうやってこんなキレーに真二つにしたか、なんだけど。」

宗助は、彼女が放ったその言葉の意味を理解すると、とても意外そうな顔をした。

「：アンタがやったんじゃ、ないのか？」

「私じゃないわよ。真二つどころか、バラバラにしてやるつもりできたもの。それが来たときにはどうよ、上と下で真っ二つにされて

て。肩透かしね。」

彼女の口からは、なにやら物騒な言葉が幾度か聞こえたが……言葉の節々に、少し残念そうな響きを含ませながらも、どこか緊迫から開放され安心してしている様子も見受けられる。

「そうなのか……。」

「うん。…あんたじゃないなら、その抱えているその子が？」

宗助は、自分の腕の上でおとなしく、いわゆる？お姫様抱っこ？されている妹の顔を見つめる。当の本人は眠っており、ゆっくりした呼吸にあわせて、規則正しく胸を上下させている。

「いいや、こいつはずっと気絶していたから……違うと思う。そもそも、こいつにそんなことができると思えない。」

「じゃあ、やっぱりあんたしかいないじゃない。別に、あんたがどんな『変な力』持っていたりしたって、私は全く驚かないし笑わないから、安心して話してみて。」

『変な力』

その言葉に、宗助はドキリとする。かれこれ3年間、秘密にして、悩んでいた自分の『空気の力』。そして突然現れたロボット。

彼女は、何を知っているのだろうか、この秘密を秘密じゃなくすれば、なにか変わるのだろうか。話せば、話せばなにか変わる？変わらない？そんなのわからない。わからないけど……

「わかったよ。今あった事を、話す。そんなに長い話じゃないけどな。」

machine head 1-10 ぼやけたオレンジ

自分に「気泡を生み出す力」がある事。

窓から音もなく侵入してきたロボットの事。

逃げようとしたが、さんざん痛めつけられてしまった事。

そのロボットが、急に真っ二つになり動かなくなった事。

宗助は、今起こった事、自分に起こっている事を全て名前も知らぬ彼女に吐き出した。

「…そう、じゃあ、無我夢中で、気付けばこれは真っ二つになってたってワケね。ふーん…なるほど。あいわかった!」

彼女は、元気よくそう言うと、腰に装着している機械のスイッチを押し、イヤホンを右耳に装着し、口元に装着しているインカムに向かってなにか話し出した。

宗助は、今ので何を理解したというのだと、彼女の行動に疑惑の目を向ける。

「あ、もしもし、不破^{ふわ}さん、一文字^{いちもんじ}ですけど。」

「…はい、あ、いや、駆けつけたら既に破壊されてて。いやなんでって、…そうです。とにかく、不破さんも来てくださいます、そういうの担当なんだし。どうせまた下手糞な休みの使い方してるんでしょ!」

受話部分から、なんだと、という男性の叫び声が聞こえたが、一字と名乗るこの女は気にする素振りもなく、

「はいはい、それじゃ、場所は司令部に聞いてください、また後でオーバー。」

と、通信を終えて、無線をしまうと宗助の方に顔を向ける。

「その子さ、あなたの恋人かなにか？」

「違うよ。こいつは妹。」

妹は宗助の手で、再びベッドに戻された。馴れた手つきで丁寧に、打ってしまったらしい頭を揺らさないようにベッドに寝かせ、布団を敷きなおし、寒くないようにと、肩まで布団をかける。

「そっか。そう言われてみれば、ちよつと似てるかも。その子、その機械になんかされたりした？」

「俺と一緒に投げ飛ばされはしたけど…。とりあえずナースコールをしよう、頭を打ったみたいだ。どこかに異常が残ったりしたら大変だろう。」

宗助がボタンに手を伸ばしかけたその時、

「ああ、ちよつと待って。」

その手が、一文字に制された。

一文字は、ふむ、とあごに手をやり、なにか考える素振りを見せ、あおいの顔を覗き込む。宗助はというと、何をするのか、じっと彼女を見守っている。

「ねえ、起きて。」

そう言って、気を失っている妹の頬を指でツンツンと突いた。

「お、おい！そんな、・・・」

あわてて一文字を制しようとする宗助だったが「ちょっと静かにし」といて。」という一言でピシャリ。

「・・・ん・・・。」

「目が覚めた？大丈夫みたいね、良かった。」

ふう、と一息つく一文字。宗助には、その顔は、本当に心から良かった、と心配してくれていたように感じられた。

だが、心配してくれるのは結構だが、彼女は一体、何者なんだろう、あの機械はなんなんだろう、何故わざわざこの病室を、妹を襲ったのだろう。次々と宗助の頭を疑問文が占めていく。

「あなた・・・だれ・・・ですか・・・？」

そして、それを代弁するかのような、妹の一声。

「私？あー、私はねえ、・・・あなたのお兄さんの友達でさ。ちょこっと用事があった。ねえ？」

「……はあ？」

思わず素っ頓狂な声がでてしまう。

「そ、そうなんですか。あ、はじめまして。私、生方あおいて言います。」

「あおいちゃんね。私は、一文字千咲。^{いちもんじ ちざき}よろしくね。」

そう言うと、ずっと右手をあおいの顔の前に差し出す千咲。あおいはその意味をすぐに理解して、すぐに上半身を起こし、自分の右手を差し出す。

「よ、よろしくおねがいます！」

あおいは早口でそう言うと、顔を真っ赤にしてぽーっとうっとりしている。

「どうした。顔真っ赤だぞ。」

と宗助が指摘すると、あおいはそわそわと落ち着きない様子で宗助の耳元に顔を持って行き、

「だってだって、お兄ちゃん！この人、めちやくちやキレイ！こんな友達いたの！？」

と囁いた。

ああ、キレイだな。落ち着いて見れば、確かにキレイだと思うよ。
だがその前にこの女の持っている刀やらが気になったりはせんのか。
というか、同性だろう、お前何を照れているんだまさかそういった
趣味が――！！

と、妹への心配で頭をフル回転させている宗助を尻目に、

「あおいちゃん、ちょっとこれ見てくれる？」

千咲はそう言っていると、ジャケットのポケットから何かを取り出した。
取り出したものが中に入っているのか、握りこぶしを作っておおい
の前に差し出した。

「……？なんですか？」

きよとん、という様子でこぶしを見つめるあおい。と、その時。

「ほい。」

宗助の角度からではよく見えなかったが、ぼん、と小気味いい音が
鳴り、あおいは「きゅう」とかわいらしい声を上げてベッドに逆戻
りしてしまった。

「お、おい、何をした！」

あわててかけよる宗助の顔の前に手を出して制する千咲。

「ちょっと眠ってもらっただけよ。大丈夫。それで、今あったこと
も、この子にとっては夢ってことになるから、なんか聞かれたら適
当に話あわせておいてね。」

千咲の発言にキョトンとしてしまう宗助。

「い、ごめん、ちょっとなにいつてるかわからない……。」

そんな宗助をじっと見る千咲。

「……。でしょうね。ま、妹の心配もいいけど、あんた自分の体の方を心配した方がいいかもよ？ 傷だらけのズタボロじゃない。（…私が来るのがちよつと遅れたせいだけど）」

そう言われて漸く、思い出したかのように宗助の体中に、痛みと疲労、それと安心がどっと押し寄せてくる。目の前が、方向がわからなくなつて、夕陽のオレンジがぼやけて、滲んで、視界が真っ白になつて――。

そのまま前のめりに倒れていく所を、千咲が腕を出して宗助の体を抱えた。

「ほら、言わんこっちゃない。」

実際千咲は、生きていただけ大した物だと思っていた。この様子だと、きつとこの妹をかばいながら、彼女にとってまったく未知であるう化け物と正面から向き合っていたのだろう。それは、一般人である彼女にとってどれだけ恐怖であったか、災難であつただろうか。想像はつく。

「アンタ、才能あるかもね。」

そう声をかけられた宗助自身は、すでに意識をどこかに手放しており安らかな顔で眠っていた。

2 未知の世界

「さーて…、あとは不破さん待つだけなんだけどなあ。」

宗助を一旦ベッドの余りスペースに寝かせ、元はロボットであった金属片を

とりあえず回収しやすいようにひとつにまとめておくか、

と考えていたその時、彼女の腰にある無線機から連絡を知らせる発信音が鳴り響いた。

「お、きたきた。はい、こちら一文字です。」

『おう、千咲、こちら不破さんだ。到着したぞ。仙谷総合病院で合ってたか？』

「ご苦労様です。ちゃんと合ってますよ。ちょっと荷物が多いんで、303までお願いします。」

『わかったよ、すぐ行く。通信終わる。』

もう一度腰の機械のボタンを押すと、たった今片付けようとしていた鉄くずに視線を向けてみる。

「ほんじゃあ…。」

数秒考える素振りをみせた後、やすらかな顔で眠る兄妹を見て。

「いいや、私も一休みつと。…なんにもしてないけどね。」

彼女はそう呟いて、ベッドの、宗助が寝ているのとは反対側の淵に腰を下ろし、手を組みぐつと真上に伸ばして、背伸びをした。

「夕陽が綺麗だ……。」

とは、彼女の独り言。

それから5分も経たないうちに、20代半ば程の男が、病室に入ってきた。

「おう、待たせたな、千咲。」

声をかけられた千咲は、声の主に顔を向ける。

「大して待ってませんよ。不破さん。」

不破、と呼ばれたその男は「そりゃ良かった」と一言、病室内をキョロキョロ珍しい物をみているかのような目で見回しながら、内部へと足を進めた。ベッドの前で足をピタリと止めると、傷だらけの宗助を見て、まるで自分が傷ついたかのような痛々しい顔を浮かべている。

「うおお、ボロボロじゃねえか、かわいそうに。岬でも治せるのかな、これ。」

「今更岬の力を疑うんですか？何回もお世話になっておいて？」

と、じと眼で不破を見る千咲。

「いや、疑うって言うか、違いますよ、それくらいひどい怪我だな、と思ったわけでした。というか、これは一体どういう状況なんだ？不破さんに、かいつまんででもいいから教えていただけると非常に

ありがたいのですけど。」

「それは戻りながら説明しますよ。とりあえずここは出ましょう。この一体を始末できたんだから、このエリアもしばらくは安全でしょう。」

「おう、そだな。とりあえず、かばんにこの鉄クズをつめこんじまうか。」

「りょーかい。」

ベッドに腰を下ろしていた彼女も、スツと立ち上がり不破のいる方に歩いていった。

それから、一時間もした頃。

303号室は、宗助たちがいた時とは打って変わって静まり返っていた。

唯一違うところを挙げると、それは窓が閉じられていることと、備品の位置が少し違うところ。

借りている身ではあるが、部屋の主であるあおいが目を覚ました時には既に空が朱色から紫色に変わろうとしている頃だった。彼女は、もぞもぞとふとんを動かし、先程まで感じていたその存在の名前を口に出す。

「お兄ちゃん……?」

兄が来ていてくれた気がしたのだが、病室は自分の呼吸する音以外はやはり静寂に包まれていた。全く、いつもと変わらない自分の病室。だが、なにか、色々な記憶がこんがらがっている感覚がして、うまく整理できない。

（お兄ちゃんが私を抱えて、よくわからなくなって、それですごく

きれいな女の人がいて…。一文字さん？だっけ？えっと、それから・
・。。)

記憶を整理している内に、自分でもなんだかよくわからなくなってきたしまったあおいは。

「夢・・・だったのかな・・・。」

ぼーっとしてまわらない思考回路を休ませ、あたりを見回している。

「あ。つるやのまんじゅうだ。」

優しい兄の事だから、お見舞いにきてくれたけど、眠っている自分に気を利かせて、お土産だけ置いていつてくれたのだろうか。もしそうだとしたら、なんだか悪いことをしてしまった。

あおいは、そんな事を考えてバツが悪そうに頭に触れた。

「いたたっ。あ、たんこぶ。なんでえ・・・？」

もしや、寝ている間になにか激しい動きでもしていたんだろうか、とか、もしそれを兄に見られていたら、とかいろいろ想像し、なんだかブルーになっていた所に、さらにはナースが部屋にやってきて、こう言った。

「生方さん！隣の部屋がうるさかったって苦情がきてましたよ！なにやってたんですか！？」

「へ・・・？い、いや、寝ていました……。。」

そんなに激しい寝相だったのだろうか、と色々な意味で涙目になりながら、身に覚えのない説教をされる、あおいであった。

まっすぐに伸びる国道を、一台の4WDが走る。その車が乗せているのは、不破と、千咲と、宗助。

あれから彼らはどうしたかと言うと、散乱したパイプイス等の部屋での戦いの形跡を消し、真二つに切れた機械と、眠っている宗助を担ぎ、千咲が入ってきた窓からそのまま出て行ったのだ。もちろん階下の入院患者にも気付かれないように。

隠し事は、どこにだって存在する。

どれだけ仲の良い友人や、恋人や、家族でさえも、必ず。彼らもまた、秘密を抱え、仲間とそれを共有しているのだ。だからこそ、人に見つからない為の隠密行動。

「なんとか病院の人間にばれずに、運び出すことができたな。」

窓を開け放ちそれによって空いたスペースに右ひじを置き、残りの左手でハンドルを持ち車を操作する不破。やれやれと運転席でため息を漏らす。ダッシュボードには、彼のお気に入り芳香剤が固定され、車内の空気を居心地の良い物にするのに一役買っている。後部座席には、先ほどの戦いで傷だらけになった宗助が眠っており、助手席には千咲が座っている。

「なんだか私たち、誘拐《悪いこと》して逃げてるみたいですね。」

助手席に座る一文字千咲は、そう言ってくっくっくと悪戯を成功させた悪がきのような笑顔を湛えている。

「笑えないっつーの。それよかおまえ、今回こそちゃんと本部に報告したのか？前も報告忘れてカミナリくらってただろ。」

不破のその言葉に、彼女の笑顔はあつという間に息を潜めてしまった。

「……。あああああああああああ!!」

そして突然叫んだかと思えば、両手で頭を抱えて今度は泣きそうな顔になり、やつちやつたよお……。等と呟きながら悶絶する千咲。

「うるせえ! 後ろの奴が起きるだろうが! ……って、まさかお前・・・!」

「また、忘れてた……。」

「……はあああああ。」

不破は先ほどよりも深くため息を吐いて、やれやれ、と一言漏らすのであった。

machine head 2—2 3人

なんだこれ……。
あたたかい……。

「……で……でに……ってて。」

なにか、聞こえる……。
人の声……？

「これ……治り……。」

知らない声だ……。
誰……？

宗助がうつすら目を開けると、そこはまったく知らない天井だった。
寝起きでぼんやりしたままの思考で顔を左右に動かし、周囲を確認する。

「あ、目が覚めたみたい。」

「ようやくお目覚めか。」

聞こえてくる声は、どうやら自分を指しているものらしい。宗助は現状を把握するためにどうするべきか、寝起きの頭をフルスピードで回転させる。そして辿り着いた言葉が

「なんだこれ。」

宗助は、ベッドに寝かされていた。ベッドの横では、シャツの上に白衣を羽織った、黒髪ショートの子が、ベッドに並行して設置されている長いすに腰掛け心配そうにこちらを覗き込んでいる。その横には、どこかで見たような軍服を着た20代半ばくらいだろうか、精悍な顔つきの男性がこちらに微笑みを向けている。さらにその隣には、男と同じジャケットを着た赤髪の女――。こいつだ。この女。この女には聞きたいことが山ほど――。宗助が口を開こうとしたその瞬間、

「おっす、はじめましてだな。俺の名前は不破ふわかなめ要かなめっていうんだ。不破さんって呼んでくれていいぞ。よろしくな。」

「は、はじめまして、私は瀬間岬せまみさき。岬って呼んでくれていいよ。よろしくね。」

と、それぞれの自己紹介に、完璧に出鼻を挫かれてしまった。やっぱりさっぱりわけがわからない、という顔をしている宗助に、追い討ちをかけるように千咲が話しかける。

「私は一文字千咲。ほら、こっちの自己紹介もすんだし、アンタの名前も教えてよ。あと、まあいろいろ聞きたい事とかあるでしょ？なんでも言っちゃってかまわないわよお！」

それも、かなり無駄な威勢の良さをもって。その威勢の波にのり、次々と3人が語りかけてきた。

「ケガはもう大丈夫？どこも痛くない？」

「おう、おまえの怪我、岬が治してくれたんだぜ？すげえだろ、ち

やーんと感謝しろよ？」

「なんで不破さんが偉そうなんですか。すごいのは岬なのに。」

「な、なんだよ千咲、別に偉そうになんかしてねえよ！」

「い、いいよ。治ったんならそれで。喧嘩しないで？」

「喧嘩じゃないよこんなの！ 岬も、ちよつとは自分に自信持ちな！」

『私が治してやったんだから、感謝しなさい』くらい言えないの！
？」

「あう……」

ついには言い争い？を始めてしまう3人に、宗助は完全に置いてけぼり。なんて言っているのかわからなくなってしまっていた。

「……えっと、その……」

宗助としては、特に考えずになんとなく声を発してしまっただけだったのだが、3人はその声を見逃していなかった。言い争う事をやめ、バツとこちらに顔を向ける。

「「「うんうんうん？」」「」」

「……………何を何処からどうやって聞けばいいのやら…………。」

「「「…………」」「」」

沈黙。

「……ごめんね、いきなりすぎてわかんないよね、そりゃそうだよ
ね。」

先ほど岬と名乗っていた、白衣の少女がとても泣きそうな顔で謝ってきた。その顔があまりに宗助の良心に訴えかけてくる物があって、謝罪の句を述べているのは彼女の方なのに、なんだか自分が悪い事をしでかしたかのように感じてくる宗助だった……。

そんな時、少し離れた場所から、また違う声が飛んできた。

「うっさいよあんたたち。廊下まで声が響いてきてる。」

ベッドとベッドの間を遮断するように設置されたカーテンをめくり、白衣を着た恰幅のいい、40代くらいの女性が顔を出した。

「岬、けが人の目は覚めたのかい？」

「うん、お母さん。」

その女性は、宗助を見るとニコリと笑い、語りかける。

「騒がしくてすまないね、あんた。新入りが来て、テンション上がっちゃってるんだ、この子達。落ち着くまで我慢してやっておくれ。それより、もう身体は大丈夫かい？」

（新入りって、なに？……って、そう言われて見れば、自分の記憶が正しければ、あのロボットにこっぴどく痛めつけられてあちこち痛かった筈なのが、今ではどこもなんともないな……。）

宗助は寝ている状態から、上半身を起き上がらせると、肩を回したり腰を捻ったり、身体の調子を確かめるような動作をする。

「はい。すごい。なんともないや。」

「そりゃ良かった。身体は大事にしなけりゃいけないからね。岬

に感謝しなよ。その子がいなきゃ、全治一ヶ月は下らなかったからね。」

「…えっと、岬って。」

恰幅の良いその女性から、自分の寝ているベッドの隣に目を戻す。岬と名乗る彼女のその澄んだ二つの黒曜石と彼の目は、バチッと音が鳴ってしまいそうな程バツチり合ってしまった。

宗助からすれば。

あれからどのくらい時間が経っているかもわからないし、どういう訳で身体が全快しているのかも全く想像しようもないが、彼女が自分に良くてくれたと言うなら、ここは礼を言っておくべきだろう。

「ああ、えっと。ありがとう。助かった。もうどこも痛くない。」

「うん。お役に立ててよかったです。命が無事で良かったよ、うん。」

そう言うと、岬はとても嬉しそうに、なおかつ照れくさそうに頬を赤らめ、宗助に微笑みを向ける。

宗助はというと、自分に向けられたその微笑に、数秒の間我を忘れ心を奪われてしまっていた。要するに、「か、かわいい……！」と思ったのである。

しかし、そんな思考に浸っている宗助の意識も、ウオッホン！という、わざとらしい咳払いですぐに現実に取り戻される。

「私は、ひらやま さちこ平山佐智子。この医務室の室長よ。覚えておいて。それで、あんたの名前も、聞かせてちょうだい。」

「……俺は、生方宗助です。生まれるに、方角の方でうぶかた。」

宗教の宗に助ける、でそうすけです。」

「宗助君、ね。いい名前をつけて貰ってるじゃないか。それで、宗助君。お互い判ったのは名前だけ。もっと色々聞きたい事があるだろう、存分に聞くといいさ。」

室長の平山と名乗る女性は、そう言って宗助に質問を促した。

「ああ、ええつと。そう、まずここはどこですか？医務室って言うてたけど、なんの医務室なんでしょうか。」

「おっと。その辺は、俺から説明させてもらう。」
そう言って、不破がずいっと一歩前が出る。

「ここは国連直属の特殊部隊？スワロー？の基地の一つだ。表向きには自衛隊所属ってなってるんだがな。この部隊は一応、S W A L O W (S p e c i a l W e a p o n A n d L a w o f t h e W a r) なんて長ったらしい名前があるんだが、これは後付けみたいなもんだ。ほんとの由来は、あまや こうすけ天屋公助っていう部隊の創設者であり伝説の兵士と呼ばれた、それはもう偉大で立派な人がいたんだが、その天屋さんが戦うときは、まるで風に乗ったツバメみたいだよ、それで S W A L L O W と文字ってつけたんだ。まあ、その辺はおいおい。」

説明が足りないと思っていた宗助だったが、説明を聞いたところで無駄だったんだな、と悟る。

国連？特殊部隊？伝説の兵士？？？なんのこっちゃと叫びたい。

（この男は最初になんて言った？『とくしゅぶたい』と言った。話の流れからして漢字の割り振りは『特殊な部隊』になるんでしょう

ね。特殊部隊っていったら、SOCOMとかSASとかみたいなの？
潜入しちやったり突撃しちやったり人質奪回しちやったり変装して
潜入したりとかしちやったりするようなイメージしかないんだけど、
ここってそういう人たちのいるところ？そもそもなんで俺がそんな
所に？？思い出せ、最後の記憶は、確か病院に妹の見舞いに立ち寄
ってだな――」

「おーい。聞いてるのか？しっかりしろよ。せっかく質問に答えて
るのに。これから自分が所属する部隊に関する事だぞ、社会は『聞
いていませんでした』じゃあ済まされないからな！」

不破は腰に手をあてて、「しかたねえなあ」とため息混じりに呟い
ている。

「す、すいません。」

……………いや、ちょっと。」

「んん？なんだ、言ってみろ。」

「これから所属するって……、」

その時、出入り口のドアの音だろうか、シャツと子気味いい音が聞
こえ、それに続き、人間の気配が部屋にひとつ増えた。その気配が
放つ足音は、短い間隔で、ヒールかなにかを履いているのだろうか、
コツコツコツと音を立ててこちらに近づき、やがてカーテンの前で
止まる。

「不破さん、データもって来ましたよ。」

「おお、サンキュ。えっちゃん。」

不破が一旦カーテンの向こう側に消え、すぐに戻ってきた。カーテンから外に出たのは、『それ』を受け取るためだったらしく、その手にはなにやらびっしり文字が書き込まれている紙が数枚見える。

『データ』を持ってきた『えっちゃん』というのは、声から判断するに女性。さらに言うなら、その声は子供っぽくもなく、かといって年はとりすぎてもいない、成人で働き盛りの年齢の女性、だろうか。

「いいえ、どういたしまして。」

『えっちゃん』はというと、そのままカーテンの内側に来ることなく、踵を返し医務室を出て行った。そして宗助は、特殊部隊というのはこんなにフランクなものなんだろうか、と未だに自分が置かれている状況に疑問符を抱くのがあった。

そんな彼に特に気を使うこともなく、不破は『データ』とやらをしげしげと眺めている。一体何のデータだと言うのだろうか。いいや、そんなことより質問に答えてもらうのが先決である。

「おお、やっぱすごいなあ情報部ってのは！どれどれ、えっと……。名前は生方宗助。これは今聞いたな。5月20日生まれの現在18歳。おお、もうすぐ19歳だな。家族構成は現在父親克典51歳と妹16歳の3人家族。身長は181cmで体重は70キロ。ちよつと痩せ気味じゃねえか？こんなもんか。血液型はA型。好きな食べ物はどうどんに米料理全般ってお前……、嫌いな食べ物はそばってお前！：城東大学商学部に通っており、性格は面倒見がよく、周囲から信頼を得やすいタイプだが熱くなりやすい一面も——」

「ちよおーつとちよつと！本当に待ってください！」

先ほどの女性が持ってきた『データ』とやらを、不破がスラスラとそこまで読み上げたところに、またしても宗助の制止がかかる。不破は、自分を止めるその声に眉間に皺を寄せ、『なんですかこの野郎』とでも言いたそうな顔で紙切れから目を離し、宗助に目をやった。

「なんだよ、今からお前の性格データ分析に入るところだったのに。」

「なんだよ、じゃあないですよ！なんでそんな詳しくなんでもかんでも知ってるんですか、俺の事！」

すると今度は、『なに言ってるんですかこの野郎』とでも言いたそうな、狐につままれた様な顔を見せる。

「ははは、おいおい、ウチの情報収集力をなめんなよ。ほんじゃあ、続き読んでいいか？」

「ダメです！というかもう結構です！というか人の話を聞いてください！というかここ日本のどこですか！あんた達なんなんですか！俺をどうしようっていうんですかあああああ！！！」

宗助は、この自分にとってあまりに理不尽かつ理解不能、曖昧模糊な状況に、頭に浮かぶ言葉を迷わずに口からいっぺんに放ち、ぜえぜえと息継ぎをする。剣道をやっていた賜物か、低くよく通る声は、その迫力で一同を慄かせた。場を、沈黙が支配する。

machine head 2-3 はじまり

医務室を包むその沈黙は、すぐに破られた。破ったのは、参ったなあと苦笑しながら頭を掻く不破だ。

「いやあ、まだ帰すわけにはいかないんですよ、これが。まだいろいろと知ってもらわにゃあいけないことが……」

その時、部屋の出入り口である自動扉がシャツつと、短く音をたてて開き、その後に続く足音は、人が一人入って来た事を医務室に知らせる。先ほどの『えつつちゃん』の足音よりも、音の間隔が広く重厚なソレは、宗助たちがいるブースに近づいてくる。やがてカーテンが開き、一人の大柄な男が入ってきた。

「」「隊長。お疲れ様です。」「」

不破、一文字、瀬間の三人の声が、同時に発せられた。これまでゆるい言動が目立っていた宗助を取り囲む面々も、この男を前にすると居住まいを正すようだ。

隊長。つまりその意味は、この特殊部隊を率いるリーダーである、という事だ。

「要、連絡は聞いている。休日なのにすまないな。」

「いえいえ、仕事に入りませんよ、こんなの。」

そう言って、不破は人懐っこい笑顔を見せた。

「平山先生。」

「おお、稲葉。体調はどうだい？」

「お蔭様で元気です。先生も、お元気そうでなによりです。」

その言葉に平山は何も言わず、ただ満足そうに笑みを作りそれに応えた。

「千咲に岬も、元気そうでなによりだ。」

「ありがとうございます。」

「そして――」

『隊長』は、ぐらりと宗助を取り囲む面々一人一人に律儀に挨拶をし、最後に宗助に目を向けると、

「生方宗助君。……成程。どこか面影さえも似ているように感じる。」

と言い、感慨深げに目を細めた。

「？」

そしてまたも不明な事柄が増え、混乱に拍車をかける宗助の思考回路。ショート寸前である。先程から、なぜ彼らは自分を無視して話をどんどん先に進めようとするのか。なんでもいいからわかりやすく情報を提示して欲しい所だ。

不破が『隊長』と呼ぶその男。身長は190cmはあるだろう大柄な体格で、しかも身体のパーツそれぞれは鍛えに鍛え抜かれているようで、筋骨隆々という言葉が当てはまる。一言で言えば野生的な風体をしていたが、言動や仕草の中には気品と優しさが感じられる。宗助は、ぼおっとその『隊長』の顔を見つめていた。

「いいや、すまない。……なんだ、相当困りきった顔をしているな。その様子じゃ、何も満足が行く説明はしていないようだな、要。」

「いやあ、なんか、話すことが多すぎて、何から言えば良いのやらって。」

いいえ、大変よく喋ってくれましたよ、と嫌味ったらしく言い返したいところだったが、隊長と呼ばれるこの男の持つ？ 雰囲気？ が宗助にそれをさせなかった。この人間につかかっても無駄だ、と悟らされてしまう不思議な？ 雰囲気？ に、宗助は何も言えずにいた。

「そう硬くならなくてくれ、生方君。説明するがその前に、千咲。」
「はい？」

「篠崎さんが直ぐに作戦室に来いと伝えておいてくれと言っていた。」

「う……。」

千咲の顔には汗が流れ、悲壮な表情が浮かび上がる。そしてそれを見た不破はやれやれと苦笑いしている。暫く立ち尽くし俯いていた千咲であったが、何か決意をしたように顔を上げ、「いってきます……。」とギリギリ周囲に聞こえるレベルで呟いた後、医務室を後にした。それを見届けた『隊長』は、座っている岬の隣に腰掛ける、口を開いた。

「最初に断っておくが、俺達は君の味方だ。これだけは、信じてくれとしか言いようがない。勝手にこんなところまで連れてきたことは謝ろう。だが、どうしても君に話さなければいけないことがあるんだ。」

「あの、ロボットの事ですか？」

「ああ、そうだ。だが、それよりもまず君の現状を教えよう。現在

の時刻は21時17分。君が病院で倒れてからおよそ3時間半つて所だな。そしてここは特殊部隊・スワローの基地。場所は、仙谷総合病院からさほど時間にもかからない位置にある。君の妹は全く健康に問題ないと連絡が来ているから安心してくれ。そして病室で機械兵「マシンヘッド」に襲われた君を、その不破と、先ほど部屋を出た一文字が保護した形になるな。」

この間、宗助はやはり黙って聞いていた。この男に口を挟めずにいるのもそうだが、先程取り乱してしまった事を恥じている部分もある。

「そういえば、自己紹介がまだだったな。俺の名前は稲葉^{いなば} 鉄兵^{てつぺい}。このスワローの隊長を務めている。ここにいる皆の自己紹介は済んだだろうか？」

「あ、はい。一通り聞きました。」

宗助は部屋を見回し、思い出すように口ずさむ。

「不破さんに」

「おう、物覚えいいな。」

「瀬間さんに」

「岬でいいってば。」

「室長の平山さん。」

「佐智子でいいよ。くっくく。」

「あとさっき出て行った女の人が一文字さん。でしよう？」

答えあわせを求めるように、稲葉の目を見る宗助。後ろでは岬が平山に「もう！」と文句をたれながらじゃれ付いている。稲葉はというと、それに答えるように優しく微笑み

「正解。なかなか優秀だな。」

と、満足そうに短く賞賛の言葉で視線に応えた。

「生方君が現状を把握できたところで、本題に入ろう。君も見ただろう、あの機械兵「マシンヘッド」の事だ。だが、約束事がある。……今から君に話すことは誰にも、——たとえば家族や恋人であっても、決して話さないで欲しい。」

宗助は、ごくりと唾を飲み込んだ。

たとえばどんな世紀の大嘘つき野郎でも、この視線には、まず勝てはしまい。

宗助が思うほど真摯で真剣な、稲葉の眼差しが宗助に突き刺さった為だ。

「……わかりました。誰にも言わない。」

「一方的で済まないな。」

「いえ。それよりも、教えてください。妹を襲った、あいつの正体を。」

「うむ。それじゃあ、話そうか。」

稲葉がそう言うと、岬や不破、平山の顔が厳しいものになる。部屋の空気が張り詰めるのを感じた宗助の表情もまた、自然と硬くなった。

「先程も少し言ったが、我々はアレをマシンヘッドと呼んでいる。奴らの身体は完全に機械でできている。これは君も知っていると思う。そして奴らは神出鬼没、ほとんどは夕方や夜に活動を始め人間

の命を狙って徘徊するのだ。」

言われれば、宗助とあおいが襲われたのも、陽が暮れる直前だった。一連の行方不明の報道は、決まって朝だったのはそういうことか。

「……。」

「現在確認されているのでも、人型の物や蜘蛛のような形をしたのまで様々だ。そして、奴らに襲われた人間は、皮や毛の一本も残さない。どういう仕組みか、掃除機のように人間を吸い取り、そのままだどこかに消えていくんだ。」

「じゃあ：最近の原因不明の失踪、行方不明者ってのはもしかして……。」

「察しがいいな。9割9分が、こいつ等の仕業だ。」

そう言うのと、稲葉は苦虫を潰した様な顔をする。

「こいつらが、命を狙う目的は……?」

「それはわかっていない。というか、偉そうにしときながらなんだが、わかっている事はあまりないんだ。奴らがどこからきて、どこに帰るかも、どれだけの数がいるのかも。ありったけの情報収集能力を駆使しているのだが……。情けない事にな。」

「……じゃあ、他に、わかっている事はあるんですか?」

「ああ。主犯の名前はブルーム・クロムシルバーと名乗る男。」

「ブルーム・クロムシルバー……。」

「わざわざ名乗ってくれやがったから、一応世界中に散らばるスワローの支部で一斉に戸籍データを調べたんだが、そんな名前の奴はいなかった。まあ、偽名だろうな。他にも何人か要注意なやつらは

いるんだが……。これがブルームの写真だ。」

稲葉はポケットから一枚の写真を取り出し宗助に差し出した。宗助が写真を受け取り、手にとってみるとそこには、一人の男が写っていた。銀髪碧眼、年は30代程。とても整っている顔で、世間で言え、所謂『イケメン』という奴である。だがその顔に付いた二つの瞳には、冷たいものしか感じられない。まるで、この世の全てを恨んでいるようなそんな冷たさしか。

「何が目的かは未だに明らかじゃないが、こいつらの生み出した機械が、地球上のすべての命を脅かしている。今はまだ数も少なくなんとかできるレベルだが、年々発生件数は増えてきている。」

「なぜ、隠さなければいけないんですか、こんな大事な事を。みんな影も姿も見えない『失踪事件』に毎日怯えている！」

「混乱させないためだ。機械兵には、生身の人間では到底太刀打ちできない。そんな、人間にとっての？天敵？？捕食者？が日常に潜んでいるなんて知れたら、社会は混乱してしまう。皆は絶望してしまう。心から笑える人はなくなる。」

「そんなこと、ばれずに通していきえると思っっているんですか……！」
「いいや……。いずれは知れてしまうだろう。実際、そういった噂は既にいくつも流れていると耳に入っている。しかし……それでもだ。」

「なんの情報もなく、本当に怖かった！死ぬと思ったんだ！いいや、妹は、俺がいなければ死んでいた！」

宗助は、徐々に感情を上手く隠せなくなっていた。生まれてこの方、死と隣り合わせになることなんてなかった彼には、あの出来事は酷過ぎた。

「だから。君のように力を備えた人間が一人でも多く必要なのだ。」

「……俺のように……？」

宗助達がいる部屋を、沈黙が支配する。隊長である稲葉は、宗助の視線から一度も逸らすこと無く見据えている。

「君には特別な力がある。その力を、あの機械兵達「マシンヘッド」と戦うために貸してほしいんだ。それが、君が今ここで俺の前にいる理由だ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0683n/>

machine head

2011年10月7日15時22分発行